



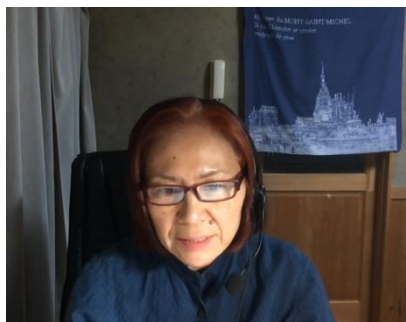
「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS 内

TEL :043-227-8557



第 4 回 連続セミナー

「セクシュアリティの適切な学習のために必要なこと」

～学んで、慣れて、伝える～

京都市立総合支援学校

支援部 医療福祉コーディネーター

平木 真由美 氏

●「性は人権です」

「セクシュアリティ」とは、狭義では、生殖器などのことを指し、広義では、生きること、「性」や「生」などを指す。好きな異性があると、それが生きる意欲につながるからである。性的な行動はスキルとして捉えると、スキルアップを目指すことができる。つまり、問題提起行動をしていても、適切な学習をすることで適切な行動をとることができるようになる。そういったことからセクシュアリティ教育は、きちんと学ぶことが大事である。セクシュアリティについて知ることは、すべての人の権利であり、「より早期に、より平易に、より具体的に、より明確に、より端的に、より誇張して、繰り返し」伝えることが大切である。ただし、大人の事情と子どもの事情を考える必要がある。また、障害の特性に合わせて、「伝える」工夫が必要になる。伝わらなければ意味がないからである。セクシュアリティ教育は、くさいものに蓋をするものではなく、（それぞれの人生に）必要なものとして教育していかなければいけない。欧米などの研究では、セクシュアリティ教育を適切に学ぶことは、性行動の慎重化につながるという結果もある（2018 年 4 月 7 日 東京新聞朝刊 <https://sukusuku.tokyo-np.co.jp/education/1544/>にも、同じような論調がある）。学校でも、七生養護学校事件の判例をエビデンスとして、どんどん性教育は推進していくべきものである。

重要性が分かっても、すぐにセクシュアリティ教育を進めていくには、問題がある。我々、大人も（セクシュアリティ教育を）教えられてきていないことが理由である。女性は、初経のタイミングで教育を受ける機会が少しはあったと思われるが、男性はほとんど機会がなかったため、我々、大人も正しい知識をもっていない人が多い。また、教科書がなく、頼るべき基準等がないことで、難しいものになっている。このことが、今回のテーマにあるように、「学んで」「慣れて」「伝える」につながる。

セクシュアリティ教育の世界の動きは、1989 年のユニセフの「子どもの権利条約」、1999 年の世界性科学学会「性の権利宣言」、2006 年の国連総会の「障害者権利条約」、2009 年のユネスコが中心となって作成した「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」（2018 年に第 2 版。日本語訳版が販売されている。）がある。約 20 年前から世界的に「セクシュアリティ教育は重要なものであるので、進めていこう」という流れができていく。

●セクシュアリティ支援

適切な支援につなげるために、支援者が「学び、慣れ、伝える」、まずは大人・支援者の学び直しから始める必要がある。特に、支援の必要な人は情報を集める手段が少なく、近くの人からの情報収集になりがちのため、影響を受けやすいと考えられる。性の問題提起行動は、目に見える部分は氷山の一角でしかなく、見えていない部分にたくさん問題があるため、問題提起行動を見て、しっかりとした分析が必要である。身体的な理由がないか、不安や恐怖はないか、暇をもて余していないかなど様々な要因が考えられる。そうした分析を踏まえて、適切なアプローチが必要になる。

支援の留意点は、①肯定的に（フラクに）、②科学的に（ノンジャッジで）、③客観的に淡々と（いつでもどこでも）、④具体的に、⑤視覚的に、の 5 つである。

●現状

障害者の「性」について、肯定的にとらえにくい現状がある。また、障害者の「結婚」は保護者が否定的なことがよくある。しかし、セクシュアリティは大きく捉えると「生きること」であり、人間の権利である。障害がある、なしには関係ないのではないか。セクシュアリティ教育で大事なことは、初めから否定するのではなく、まずは肯定することである。そして、セクシュアリティ教育の目標である、本人なりの性的自立を目指す。そのためには、身体的、精神的、生活上、社会的な自立も必要になる。

日本は「ジェンダーギャップ指数 2021」で、120 位と先進国の中でも最低レベルにあり、日本全体での理解や取り組みがまだまだ足りていないことが分かる。今後、セクシュアリティ教育を推進していく上で、社会全体の理解が進むように努力が必要になる。

●アウトプットして伝える～「学んで、慣れて、伝える」～

子どもたちから質問されて、ドキッとしたり、答えに困ったりすることがあると思う。そこで、事前にどうやって伝えればよいのかを考えておくといよい。「セックスってなに？」や「勃起ってなに？」など、それに対する答えを考えておき、うまく伝える準備をしておく必要がある。また、性交のリスクや性暴力、避妊など扱いにくいことにも向き合って、正しく伝えなければいけない。「寝た子を起こすな」という言葉のとおり、日本ではあまり性教育を進めてきていなかった。今後は、しっかりとこの難しいテーマに向き合い、誰もが『年齢』も『性別』も『障害』も関係なく、人権としてのセクシュアリティを大切に世の中になってほしい。

※別紙資料として、「子供たちからの質問に対して、事前に考えておくべき回答ワークシート」を提供いただきました。また、講義の最後には、セクシュアリティ教育に関連するおすすめの著書や動画、SNS も御紹介いただき、今後、支援者として実践していくヒントをたくさん教えていただきました。

令和 3 年度千葉県 TEACCH プログラム研究会第5回連続セミナー 講師紹介

演 題:「行動上の課題への対応」【配信期間:12月3日(金)～12月26日(日)】

講 師:田熊 立 氏 社会福祉法人菜の花会、千葉県発達障害者支援センターCAS地域支援マネジャー

長野県出身、東京学芸大学教育学部障害児教育学科卒業、筑波大学大学院心身障害学研究科博士課程単位を取得する。博士(学術)、臨床心理士、公認心理師の資格をもつ。

平成15年より千葉県発達障害者支援センターに勤務している。現在は、副センター長と発達障害者地域支援マネジャーを兼務し、県内の発達障害のある方やその支援者に対しての支援やコンサルテーション、研修会やカンファレンスにおける講師として、幅広く活躍されている。

千葉県 TEACCH プログラム研究会第6回連続セミナー(実践報告)の お知らせ

配信期間 2月上旬から下旬(予定)

視聴会日時 令和4年2月19日(土)14:00～15:30(受付開始13:45～)

視聴会場 千葉県教育会館203会議室

演題および発表者

○八千代キャラバン隊(保護者)様「八千代キャラバン隊の活動の取り組みについて」(仮)

○松本恵衣(施設職員)先生「コロナ禍における施設での支援の取り組みについて」(仮)

○三国寛伸(教職員)「特別支援学校における支援の取り組みについて」(仮)

【編集後記】今回初めて編集を担当しました。学校で働く身として、「性教育」というのはいつも難しいなと感じていました。「性」のことだけでなく、「生」のことについても考え、一人一人がよりよく生きていけるようにしていくことが大事だと感じました。新型コロナウイルス感染症など、緊急事態が起きると、いつも弱い立場の人から切り捨てられていくように感じます。障害者、高齢者、女性などの権利を守ろうという動きが日本でも出てきたことは良いことだと思います。先生の言葉にもあるように、お互いが尊重して、生きていける世の中になってほしいと感じました。(三国)